「や　さ　し　さ」

これは以前、ある新聞に載っていた話です。

新興住宅街の小学校卒業式でのこと。いつ、だれが始めたのかわかりませんが、この小学校では、紺のブレザーに赤いネクタイが男の子の卒業生ルックスと決まっていました。けれども、今年は全員そろっての晴れやかな舞台のもとで、ささやかなドラマがありました。知っているのはほんの一部の子どもだけです。

その朝、６年間の締めくくりのクラスに入ったＡ君は、「やはり着てくればよかった・・・」と唇をかむ思いでした。彼のいでたちは、ワイシャツこそ来ているもののセーター姿。２年前に離婚して母の方の姓となった彼には、家での添削の仕事をする母の後ろ姿を見て、「買って欲しい」とは言い出せなかったのです。だからといって貧しいということではありません。医者だった父親からの送金や資産家の実家からの助けもあります。分類すれば裕福の方に入るのですが、おそらく勝気な母の意地や生き方なのだろうと、Ａ君は働き疲れる母を一人静かに観察していました。

やっと卒業。「中学生になるといろいろかかるわね」と、制服などをそろえながらため息をつく母の目のまわりの疲れの訳に思いをはせると、やはり口ごもってしまいます。

卒業式。一人ひとり壇上に進み出て、卒業証書をもらいます。結局、Ａ君は紺のブレザーと赤いネクタイ姿で壇上に立ちました。

さてどうしたのでしょうか。なんと早業でほぼ同じサイズの同じ子のものを体育館で座りながらバケツリレーのように手渡したのです。「クラスの３分の１は普段着だ」という子どもの言葉を信じていた母親は赤面しました。

一方、担任は涙が出るほどうれしかったといいます。みんなが助け合って決して一人もみじめな思いをさえなかったことが、何よりの卒業のプレゼントだと声を震わせました。

今の子ども達は、思いやりややさしさが欠けると言われています。そういわれるとたしかにそういう子どもは昔に比べると多いような気がします。しかし、それは昔の思いやりや優しさをはかるものさしで見ていっている部分ではないだろうかと気になるところでもあります。

このような現代っ子のさわやかなやさしさは、昔のものさしでははかれない素晴らしい宝だと思います。やはり、今の子には今の子を見るものさしが必要なのでしょう。